

山崎與次兵衛壽の門松

近松門左衛門作

上卷

歌筑波根の峯より。落つる。瀧の白玉。一
二三四。五六七八。ナホス。フシ九軒の町に。
地羽かはす。比翼の羽子板木樂子も磨入れ
ては色になる。戀の二葉の禿松。フシ枝と
枝とを遣羽子も。地三四いつも末ながき。
返事に刷るゝ門の松。抱への松あり客も待
つ先づ新町の初子の目。松澤山に深翠。千
代も根引はフシ絶えずまじ。詞コレく新助。
いやといふ物無理に突きやつてそれ見やの。
羽子を松へ突きとめやつた。地元の様にして
返しやと袖に取付く禿ども。ナウ詞取付き
やんな男に突かすりや留るとは。頭から知
れた事。地珍しさうにと振放し。手を拍い
てほつほらほ此方や知らぬ。あべかこの新
介と走つて内へ駈込めば。そりやく逃す

な捉へよと。羽子から起る諺は。フシ飛ぶが
如くに追うて行く。ハルフシ情口説の。萌
出づる。雪間に素足伽羅薫る。霞の袂虹の
帯。冷泉雲の。上着を。ゆりかけて。新艘突
出し出立榮え。歌紺に鬱金に薄染淺黄。織
物縫物染物盡し。小紋三重染。二重染淺黄。
鹿の子に彌鹿の子。紫鹿の子に經る年の愛
さをも。芥子の紅鹿の子。極彩色のフシ越
後町。三筋に三つの。春立てば。松若綠梅
時節。やりが前垂西さす天も酔うたり人も
酔ふ。初盃の内祝ひ。過ぎて諸禮の妓揃へ。
フシ雪駄の音のしやらくと。地春めくうち
に紫は色の司や藤屋が内。文地吾妻といへる
名木の。松には續く花もなき。戀と。惻發
を目の張に。情こぼるゝ道中は。往來の人
も。フシ立留り。地花を見捨つる雁も。歸

り廊の晴れ處。身にも年にも恥もせず。
七十ばかりの古婆の古綿帽子の頬冠り。春
知り顔に七つ屋の藏の戸出づる鶯茶の。布
子の袖を摺れ纏れ附纏ひ行く足許。遣手の
かやが聲高に。詞是爰な婆様。此の廣い
道を何ぞいの。高砂の尉と姥が離別したや
うななりで。太夫さんに摺れ纏れエイ嫌ら
しい小舌たるい。彼の後から同じ様につい
て来る若い男は。昇夫の風とも見えぬ此方
の連か。地とつと退いてもらはうと押し
やれども腹立てず。詞ヲ、お道理様や御
免なりませ。音に聞えた吾妻様お慮外なが
らしみんと。お話し申したい事御座りま
して廊をぶらく致します。どうぞお聞入
れなされてお情に預かれば。地婆が後生も
助かります大事のくの太夫様に。鹽の辛
い梅干婆がすいこな奴と思召そ。フシお恥
かしやといひければ。詞ヲ、いや。口合を
やらるゝ。是女郎様たちの全盛を見掛けて。
姨の祖母のといふ騙りことは古い其の

爲の遺手。是目が黒い見ておきや。ナウ怖

い事いうて下されな。騙り事いふ様に見え

ますか。ア、貧乏はせまいもの。連合は船

場で隠れもない。千貫目の廻しもした難波

屋の奥左衛門。爲換の金が滞り。大阪を仕

舞うて八幡へ引込み果てられた。其の難

波屋の婆でござる。地あの頼冠りは獨り息

子。千貫目の大釜の湯氣で育つた奴なれど。

與今では錢一貫の廻しもならず。地難與平

く。其の日過の日備取り騙りと見ゆる

もお道理と。老の繰言目に涙。問はず語り

に古を。フシ思出したる風情なり。地引舟禿

遠慮なく。ム、踊歌に謠ふは婆の事か。踊歌

ゑい。山崎ナ。八幡山崎難與平のお

婆。ヤア此の誠に金を出せさ。フシ盆にござ

れと笑ひける。地吾妻は始終貫泣き皆の衆

は何笑ふぞ。戀であらうがあるまいが動

めする身の習ひ。落ちめと聞けば見捨てら

れぬ吾妻を見込んで頼むとは。愛らしい

婆さん傾城冥加聞氣でござんす。地愛は人立

繁山。ちよつと横町の小店をかりの揚屋町。

爰へくと手を取れば涙を流し。忝やく。

何のお咄申す事とて此の祖母が此の年で。

何の願ひござりましょ。月とも星とも思ふ

はあの與平め。日外や人に雇はれ此の新町

へ文の使の序に。吾妻様を見染めてホ、

ホ、親の口からア、おはもじ。戀病に煩

ひます。家主隣の聞えもあり。御器提ける

瑞相かと。叱つて追出して退けうか

と存じたれども。ア、昔の身ならば若い者

の手かけ妾のといふ最中。申しにくいが大

夫様たち一年二年買詰めても。何處の痛み

にもならぬ身代其の氣で育つた奴の事。地

ア、可愛やどうぞしてやりたいと。母が瘦

我も子の望みも金銀といふ強者には。又し

てもへしつけられ見殺しにする子の命。■

氣遣ひするな情を商賣になさるゝ吾妻様。

歎き申してお盃戴かしよそれで思ひ切りを

れと。地彼奴を連れ附纏ふも子の可愛いさ。

母が命の一夜さの傾城代にもなるならば。

今でも死んで見せませう。押付けがましい

事なれど。ちよつとばかりのお盃是で上つ

て下されと。袖から出す小半入りの徳利に

除る親心。かけ盃の蒔繪の狸々笑ひ高じ

て涙の種。泣く事知らぬ遺手さへ。フシ彼方

向くこそ哀れなれ。地聞く程吾妻押俯向き。

粹な婆さんわたしが言はう詞がない。與平

様は何處にぞ顔が見たいござりやせと。呼

ばれて祖母も一時に千年を延ぶる門松の。

影に隠るゝ難與平。フシ指を喰へて這出づ

る。袖口取つて引寄せ惚れたくと人ご

とに。誠もない口癖さへ勤めする身は先づ

響。公平の様な男を煩はしたは此の吾妻。

嬉しうござんす忝い。命にも代へ身にも

代へ逢ひ通したい物なれど。戀というては

ちよつとの詞もかはされぬ深い男があるわ

いな。山崎の與次兵衛様と申して。新艘の初

床より。地面白いと悲しいと譯のありたけ

しつくして。勤めは名ばかり夫婦というて

今一人と。外には漏す水もなし。というて

母御様の御眞實。切にお前のお心入れ立ち

ながらの盃に。酌流さんも本意でなし。

これ重山預けた物それ爰へ。地あいと答へ

て引舟が袂の内の袱紗物。色こそいはね山

吹の十兩ばかり一包。是も可愛い山様ゆゑ

譯のある金なれど。母御様へ進ぜませす。

與平様の身の廻り立派な大盡に仕立て、下

さんせ。渡り並の客に身を賣るは傾城の習

ひ。地枕をこそ交さずとも年月の物思ひ。

酒で流して下さんせと渡す小判を難與平。

吾妻が膝へどうと投付け。圓鬨にござる

曲がないおりや金にや惚れぬ。貧な者と侮

つて金で口を塞ぐのか。我等が宿は庭かけ

て七疊半。貧乏神のお旅所といひさうな住

居。師走正月も同じ布子一枚なれど。傾城

に金貰うて揚屋へ往たといはれては。此の

難與平人中へ面が出されうか。地戀にかこ

つけ物取りとは目利が違うた吾妻様。七十

に餘る母迄各に顔まぶらせ。無念にござ

る。許して下され母者人と聲を。忍びて泣

きけるが。アア地よう思へば恨みしは不調

法。圓追付け與次兵衛殿に請出され奥様に

備はるお身。我等は日備取内方へ雇はれて。

沙汰でもすればお身の爲に悪いと。後を大

事になさるゝは尤々。氣遣ひなされなふつ

つりと思ひ切りました。地鼻の先ばかりで

戀せぬ證據は是なりと。腰の小刀ひんぬい

て既に小指に押し富つれば。吾妻取付き待

つて下され誤つたと。ステヤうくく押し

留め。圓金進ぜたは過りなれど。身の納り

を思ふなどとさうしたさもしい吾妻ぢやな

い。地與次兵衛様には稚馴染の本妻あり。

父御様は隠れもないいしんぢよなり。妻か

ら起るお宿のもやく。格氣やら御意見やら。

跡の極月の二十日前ちよつと逢うてそれか

らは。不首尾く文ばかり昇夫揚屋の付

届。初紋日の實論もわしが獨の胸算用。年

のある上年切増し男の恥を包む程。身脱の

ならぬ此の苦患。廓で婆になる吾妻。可愛

いと思つて下されと。恥も哀れも打明けて。

つがなく飄す正月の涙も。顔に憎からず。

絞る袂の上二重襦袢脱いで帯解く。逢ふ夜

の床の温まり又逢ふまでは冷まさじと。深

い中着は烏羽玉の黒羽二重の蛇の目の紋。

與次兵衛様ののお小袖暫しも身は放さねど。

是がわしが心一ぱい是を着て。圓表向の客

になつて下んせと。地小袖渡せば難與平是

が誠のお情。私戀は叶うたとステヤ押戴いて

泣くばかり。地母は始終つくりと。のう

お傾城の詰開は。むつかしさうな事やとて

フシ耳を澄ますぞ殊勝なる。地與平涙押し拭ひ

お前に逢うて眞實の。涙といふ物覚えまし

た。金の草鞋で尋ねても。二人とない女郎

に思はるゝ。地與次兵衛殿はあやかりのもの

着物を戻しませう。代りには以前の小判

貰ひましたと。取る手を母がはつたと打

ち。圓ヤイ卑怯者。今の詞がはや違ふ難波

屋の家に瑕付けるか。下卑た奴めと叱られ

て頭掉り。いやく身の慾に致すにこそ。

吾妻様と與次兵衛殿是程の深い中。聞捨て

ては男が立たぬ。此の金を此の儘置けば揚屋の庭錢埃にわがせになつてすたります。地小判と見れば小判吾妻様の身の油。金をおれが預つて此方も身から油商ひ。どか儲すればどか損するついと江戸へ下つて。十兩を百兩百兩から貳百兩。貳百兩から五百兩段々儲の商ひ拍子。千兩にするは三つ羽の征矢。關東廻しの商の筋道は我等が家。吾妻様根引にし與次兵衛殿とお二人悦びの顔を見て。今日の情の御厚恩を送らねば。此の難與平立たぬ。常々金がなくは是を買うてかう賣つてと。心當の事どもあり。江戸の道中二歩では高砂野宮。母じや人は横堀の妹婿に預けりや緩り。其の内金も上しよし難與平が立身。吾妻様の御出世。與次兵衛殿の本望。千里一飛び一拍子。フシ一器量ある男なり。地聞けば聞く程頼もしい御心底此の吾妻に戀ある身で。與次兵衛様に末長う添はせうとて俄に江戸の思ひ立ち。二人が中の結ぶの神さん。門出の盃しみる。

お禮申したし井筒屋へ伴ひましょ。地母御様はどうぢやへ。イヤ與平が望み叶へば此の世からの生佛。太夫様おさらば。地いよいよ頼み上げますると與平が脊中しと、打ちこりやあやかりもの嬉しかくと。興を持たせて和らぐる。母は幫間子は大盡はつと打ちたる露よりも。太夫が情いたゞいてオクリ歸るさへ急ぐ。フシ長持急ぐ。いそぐ賑々揚屋町。遣引舟がアレく。太夫さん。阿波座からうるさい利郎が見えるぞ。地ほんに。贊吐きの彦さん。しかもづぶく。酔うた足許。見咎められて猶悪口とオツリたぐり。寄邊の井筒が本。内證花車に吹込めば。込んだとはかり與次兵衛が小袖をかりの難與平。見馴れぬ揚屋の大騒ぎヌエテ戀ぶるひして見すほらし。地足はどれても目角は強き袴肩衣横筋かひ。町一ぱいをひよろくと直にどれ込む井筒が座敷。吾妻は煙管の吸口閉ち物もいはずにあちら向く。與平は人に見られじと炬燵の内へ顔さし入

れ。被く蒲團の緞子より。フシ五絲緞の事ぞ思はる。彦介花車を引提へ。詞コリヤ花車様め聞き給へ。正月は新春の御慶目出度申納め候。この。此の鼻は新酒の酔紛れ積る恨みを申し始め候。ナなんと。否か。面白しい。其處な遣手め能う聞け。いかな吾妻殿でも。太夫様でも。畢竟直段の高い總嫁ぢやないか。何と。いやか。いやとは申されまい。それに山崎與次兵衛には賣つて。此の葉屋の彦介には何故賣らぬ。一文一錢値切らぬ拙者を。如何なる者とか思ふらん。忝くも桓武天皇無體の後胤。攝州津の國服部の住人葉屋の彦介。大阪に五間口の店も所持仕る。貸藏も持參つかまへさ。大金持を知らぬかな。ア、慮外乍ら。否とはいはれまい。都島原上林の高橋に金遣うて髪切らせた。伏見撞木町榭屋の高尾に。又した。か違うて。心中に生爪を放してくれた。まだ鼻もそいでくれた。耳をそいでくれた。大々盡の彦介。山崎の與次兵衛に

仕負けて藤屋の吾妻に。三度四度ふられては此の彦介一分立たぬ。半分も立たぬ。今日から三日ひこする欄だ。相場の高い綿家の買初仕り。金銀米錢ぐわらり。くくと撒散したら吾妻がぐるりくくと廻らざ賭ちや。サアくく買うた地ラシとしなだれ寄れば。吾妻むつと頬がまちひつしやりとみしらせ。同エイあた贅張つた聞きともない。其の高橋とやら高尾とやらは。其方の様なうつそりでも。金さへ遣へば髪も断ろ爪も放そ。京や伏見は知らぬが此の。新町の傾城は魂が違うだ。恐らく此の吾妻はいかなく。一生身揚り仕暮しても。其方の様な意地腐りに。小判の梃でも動く女郎ぢやないぞや。がやく口きく男の。地意地ならば手柄に吾妻を廻して見やとすんど立つ。同ム、張の強いに猶惚れた。此の彦介は吾妻を廻して見しよ。廻るはく。遺手めが面がぐるく廻るは。爰の家も廻るぞよ。廻るはく山姥が。山又山に山廻。

面白い。地どうでもかうでも吾妻殿をフシ奥へ連れてと引立つる。地どれに下地の無意氣力ははどうぞと引退くる。引舟に向ふ風花車は彼方へ押込んで。遺手も取つて鐘梅の落花狼藉。昔怵えぬ難與平齒切りをしても堪忍ならず。彦介が足首を炬燵の内より確と取り。うんとしむればあいたた。同ヤレ足首が地ちぎるゝわと目は撃むれど口減らず。同此の炬燵には狼があるさうなと。地蹴もちるを引倒し蒲團押退けつと出で。熟柿臭い彦介が。鼻の先に遊柿のフシ遊い顔して立降かる。同ヤ此奴何ぢや。何者とは眼明け人ぢや。男ぢや。男といふ物見て置け。うぬは何者。葉屋の彦介といふ男見ておけ。ヤ生臭い男呼ばはり。おけく置いてくれ。額に毛抜も當てる者が。いとしほげに女郎衆苛つて何の男。サア男が定なら俺とせい。サアせぬかい。いやせぬかい。地男同志の喧嘩といふ物教へてやろとつと入り。小腕捻上げ引攪いで逆と

んぶり。ぎやつといはせつでんどう腹這にはつたと反めらせ。腰骨を七つ八つうんと云ふ程踏付けて。鼻唄に懐手吾妻つきん可笑しさ怵へ。フシ笑を殺す笑止顔。地彦介漸う起上り。同聞えたく。與次兵衛が間諜者彦介を踏んだぞよ。山崎與次兵衛覚えて居れ。したが踏まれても此方に七歩の勝。正月早々俺が身代。踏廣けてくれたな。殊に今年は戌の年。犬は土に寝るものな八卦に叶うたコリヤ。地人の巳午が恵方ぞと胎を張つて立ち歸れば。踏まれてさへの願。人を踏んだらどうあるとオクリ跡は笑ひの賑ひや。歌正月買の騷初め飾の下では三味弾き。梯子の陰では寶引節分豆撒け鯛。蜜柑柑子桶。橙と祝うてどこも吉野。樞搗栗噓でござらぬ。フシ穂俵。喰搦に土器。さすぞ盃ちよつと押へて去年より今年はみづくく。若みんづりの井筒屋とフシわきて賑々。賑へり。地粹の粹を

越えたる戀の山崎與次兵衛。駕籠を飛ばせて西口より。野夫がいきつて旦那お出といふより家内。こりや目出度いと既足で飛んで門口迄。福の神のお迎ひ。ちやうさやうさや千歳樂萬歳樂。地奥の座敷に、フシ設けの炬燵。亭主蓬來内儀は銚子娘は土器。牛蒡も身祝ひ太夫様も御全盛。お庇で我等も仕舞は緩るり鐘子で。先づ大福の口明に變つた咄がごんすると。吾妻は與平を與次兵衛に引合せ。ありし有様一々を語る詞に與次兵衛。調豫て意趣ある葉屋の彦介。どうがなと存ずる折節忝い與平殿。此の以後は何時迄も心安う御意得ませう。地お手上けられいと一禮す見馴れ言馴れ聞きなれぬ。詞遣ひも第一は。足の痺に難與平只。フシあい／＼とばかりなり。御律義で重疊々々。江戸へとの思立ち尤々。吾妻が事は苦になされず。地一廉の儲して仕合の上落。門出に夜もすがら歌飲めや謠へや一寸先は闇の。地夜ととも母が案じて居りませ

う。いかい御造作與次兵衛様。吾妻様皆様つらりと遣立てたお暇申すと立出づる。餘りといへばけたたまし。今宵一夜は苦しかるまい。いや／＼一分は寸の始まり。油断は稼ぎの太毒と帯引解けば吾妻取付き。寒い折から御遠慮無う矢張り小袖を召しませい。道中も大井川とやらいふ川は。いかう危い事ぢやけな。地御無事で吉左右待ちます。やがてと別れ與次兵衛も見送つて與平殿。山崎には兄弟ありと此の與次兵衛御心便りに思召せ。慮外ながら江戸にも兄弟ありと思召し。互の無事は狀通と。地フシ別れて跡は戸障子しめ。月も雲井に寢靜まりフシ松に。嵐は。解して。地與平は九軒を一足二足三番太鼓打ちやみて。廓淋しき折こそあれ。待伏せしたる葉屋の彦介。蛇の目の紋を知るべにて與次兵衛と見るよりも。瞞し賺してはたと切る。ひらりと外し難與平。扱は背の白痴者意趣返し待伏せかと。つゝと入つて跳倒し小刀を逆手に滅

多突き。眉間を突かれたた打つて。ヤレ人殺しと鑿立つる。見付けられては出世の邪魔と。おくれを見せぬ難與平。フシ風を追うてぞ逃げ失せける。地町中俄に騒出し棒よ熊手よ提灯出せ。大門打てとひしめけば彦介はうろ／＼と。調相手は山崎與次兵衛。井筒屋の客めぢやと喚喚き立つれば與次兵衛。聞くより胸にはつしと應へ與次兵衛はにと立出づる。聲を知るべに彦介は後よりしつかと抱留め。調相手は捕へた組伏せた。騒ぐまいといひければ。地吾妻引舟遣手まばかりの涙さへ何と。なる身の三箇

中 卷

親淨閑に預けられ。相手の疵は養生し死ぬるか本腹か。二つ一つの左右次第我も生きる瀬死ぬる瀬を。定めかねたる飛鳥川。フ

シ明日が日知らぬぞ力なき。地一家の内に取分けて女房お菊の物思ひ。一日も氣をつ

めぬ人。類も出ようが何がな心慰むと。禿る餅も我が胸も。共に焦る。フシ庭傳ひ。

障子明くれば與次兵衛。色も青ざめうつとりとフシ氣あひ。惡氣に俯向けり。四三日

はお食も進まぬ。何處ぞ悪くば薬でも参りませ。地體お前の短氣が妾が明暮苦になつ

た。若し私にいたづらあらば。先の相手を切りも殺しもなさる。筈。ハテ傾城は寶物

幾人にも賣らいで。よしない法界。格氣から此の難儀も起つた。但其の吾妻と私と

一つに思つて下さんすか。地こんな事知つたらば一寸も出すまい物。格氣せいで今で

は悔しうござんすと。ステ恨みまじりのうろく涙。聞いてたもるなく。一天

下の人よりも和女一人に恥かしい。さりなる

がら石清水八幡宮も照覽あれ身は斬らぬ。なれども彦介めが與次兵衛やらぬ覺えたかと仕懸れた喧嘩。身が斬つたも同然。殊に

其の切手とは男同士の義理ある中。地奈落の底まで此の與次兵衛が切つたになつて。

相手が死んだら切らるゝ覺悟。とはいへ彦介め左程の疵ではなけれども。強請つて金

にする奸計とは鏡にかけた事。見すく金で買はるゝ命。此方の藏の金銀では買は

れぬさうな。預けられたは母の命日。皆是親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。

親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。

親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。

親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。

親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。

親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。

にやるか又後に見舞うてたも。地いとしゃ寂しからうのと夫婦の顔も打萎れステ涙隔て、引立つる。明くる障子の明りにも、フシ

暗む心ぞ哀れなる。地與次兵衛見舞として毎日淀の渡し舟。梶田治部右衛門は相親家

の聲を思ふも娘の爲。老の心を惱ませども父淨閑はさもなくて。調ヤ治部殿お出で。

昨日のさしかけの將基勝負付けましよ。サアござれ是は餘りな淨閑老。拙者が毎日老

足を運ぶも。與次兵衛事氣遣ひさ。將基さしには参らぬ。地昨日の勝負は何方へなり

とつけてお仕舞くといへども。いやく馬鹿めが事は運次第。昨日の駒動かせず置

きました。調サアござれく。然らば勝つても負けても是一番。昨夕から盤の上とつ

くと見定め。工夫した相手とさすはこはもの。お手は此方サア遊ばせ。先づ飛車先

の歩を突きませう。ヤ此の成金してやらうでの。かう寄りませう。淨閑頭を叩い

て。ハア、南無三。此の馬落ちた盛深田に

馬を駈落し。引けども上らず打てども行かぬ望月の。駒の頭も見えばこそナホス難しゆなつたと、フシ案じける。地お菊盤の側に寄りこれ父様。同彼方の方が落ちれば此方も落ちる。兩方の睨合で何時迄も埒明かぬ。迷惑する駒はたつた一枚。淨閑様のお手には金銀がたんとある。慾を離れて金銀さへお打ちなさるれば。これ此の父様の向ふの淨閑様の此の馬は助かる。地どうぞ手にある金銀を打出させます様に。思案して見さしやんせ。合點かくと袖を引けば治部右衛門打首首き。同テ、くく能う智恵付けた飲み込んだと。地いへども淨閑氣も付かず。同親ぢやと思つて助言いふまいく。又ちよつこりと歩で相致そ。ム、シテお手に何々。淨閑が手には金三枚銀三枚。歩もござる。此の歩で廻したら未だ金銀が殖えましょ。いかい金持羨しいか。金持とは此の角が尻んで居る。斯う寄つたらば金銀出して打たずばなるまいぞ。でも金銀は放

さぬ。柱馬をあがる。治部右衛門堪へ兼ね。ハテいかい吝嗇坊。澤山な金銀握りつめて何になさるゝ。來世へ持つて往かるゝ。是御覽なされ。此の飛車を斯う引けば。天にも地にもたつた一枚の此方の此の王が。片隅へ座敷牢の如く追籠められ。今この間に落つるが金でも銀でも打散らして。圍うて見る氣はござらぬか。我等が吝しいは知れたこと。座敷牢へ入らうが都詰にならうが。金銀は手放さぬ。歩あしらひで見しらせう。此方も歩を以て夫に首を提げらるが悔みはないか。構はぬく。先づ逃けて居ませう。コレ其の内に香車の鍵を以つて鍵玉に上げらるが。それでも金銀出すまいか。勿體ない事鍵玉に上げられうが。獄門に上らうが。手前の金銀は放さぬくと。地兩馬強き慾の皮側でお菊は氣を揉みて。包む涙も手見せ禁。フシ命手詰と見えにける。地治部右衛門腹立ち顔盤中の駒播寄せ引摺み淨閑が眉間にぐわらりつと投付けた

り。お菊はつと驚けども淨閑はびくともせず。治部右衛門膝立直し。同恥を知れ淨閑。相親家はもと他人駒を面へ投付けられ。咎めもせぬ恥知らずにいふも國土の費えながら。將棊に事寄せ金銀出して扱ひ。與次兵衛命助けよといふ當言。合點せぬお主でなし。夫に首を提げられ鍵玉に上げられても。金銀としては出さぬとは。治部右衛門に氣を焦らせ面白いか可笑しいか。其方も獨子此方も獨娘。兩方共に懸替なし。架を子と思つて居るが嫁を娘と思はずか。與次兵衛が切られたら可愛やお菊が歎かうと思ひやつてたもらぬは。エ、さりとはは恨めしい。縁組の時婆がとめて小身なりとも待に縁組みたい。何ほう分限者金持でも。町人とは馬が合ふまいとくれく留めた。否々名に觸れた山崎淨閑。武士交りもする仁と。地我一人情ばつて此の頃婆が恨ごと。お主が吝しい無慈悲から五十年添ふ爺婆の夫婦合迄不和に成り。我が子の命に替へぬ

金銀さぞや親類縁者が飢死するとも構ふまい。我こそ浪人主人持つた一家もあり。物知らずと縁を組み一門の名を汚す。無念至極と許りにて喘上げ。泣きければ。浄閑もしばく目。地侍の親が育て。武士の道を教ゆる故に武士となり。町人の子は町人の親が育て、商賈の道を教ゆる故に商人となる。侍は利徳を捨て、名を求め。町人は名を捨て、利徳を取り金銀をためる。是が道と申すもの。如何なる大病難病も病には療治さまぐある。國法で取らるゝ命には人蔘で行水させてもいかなかな助からねど。金銀では助かる命の買はるゝ金銀。大事の寶といふ事を與次兵衛めが知つたれば。此の難儀は仕出さぬ。何ほう惜み貯へても死んでは帷子一枚とは。此の浄閑も知つたれども。地死ぬるまで金銀を神佛と尊ぶ。是が町人の天道。金の罰の當つた奴まだ此の上に惜氣もなう。金出して如何なる天罰大難にがな

遭ひ居ろかと。可愛い程猶出しかねる。吝い名を取る此の浄閑金銀ばかり惜むでなし。塵灰まで惜しい物。たつた獨の世倅の命。惜しうなうて何とせうと。坊主頭を將茶盤スエテとんと投伏し泣きけるが。地治部右殿のお恨みも掣可愛さとは存すれども。左程に思召すならば。なぜ日頃フシ引寄せて。意見もして下さつたら斯様の事は出来まい物と。我が子の痴氣は思はず脇がかりの恨みが出る。子故には愚鈍になり不調法申すも存せぬ。奥へ參る治部右殿。ア、死んだ婆は果報ぢやと。涙に咽び立ちければ舅も恨みいふこともスエテ泣くく。表へ立出づる。フシ跡にはお菊。地將茶盤どこへ取付く島もなき。浄閑様のお詞の道理は聞えたやうなれど。金銀なければお命ない。あの内藏の金箱も用に立てねば將茶の駒も同じ事。ア、慈悲のない親御やと浮世の頼み涙にくれ。無常心や入相の鐘物。凄く三三へ暮れ渡る。フシ雁の數讀む。隴月。地泊り

鳥の寄る邊なき。藤屋吾妻がわくせきの。思ひを乗せて在所駕籠。スエテ淀の川水流れの身。海邊行くも山崎。歸るも山崎。霞が内の。畦傳ひ。フシそりや打渡す。丸木橋。地見なれぬ目には恐しく。長地駕籠を留めて下り立ちて所體作るも町風に。譯なき夜半の松の風。裾吹返し呼びかはし。戀の山崎そんじよう其處と人の教へし家並も。所稀なる家造りの裏門扉のかゝりまで。フシ扱は爰ぞと知られける。調駕籠の衆此處が與次兵衛様のお屋敷。堀越に見ゆるがお部屋さうな。地いとしやあれに押籠められてこそわしや彼處へ往くぞや。圓ちつと隙が入らうとも必ず待つてや。戻りも頼むぞや。烟草がなくなば進ぜうか。地ついで往てこうと掘軽く。フシ寄る程扉の高ければ。伸上りく。伸上りても燈火の影も通さず隙間なき。用心厳しき内の體。嵐と共に路次の戸を敲いて吾が胸踊る。耳を壁に押當て。聞けどひつそと音もせず何時迄斯うして居

たととも。誰が知らせの便りもなし。吾妻が来たと呼ぼうかと。竹ひ足は釘氷身もフシ冷え渡り沓えかへる。地炬燵さへなき座敷牢いとしや寝て起きてかとお菊が見舞ふ駒下駄にフシ飛石傳ふ足音の。サア是ちやと飛立つばかり。與次さんぢやないかいな。あるにもあられず吾妻が見舞に來たわいなと。聞聞くよりお菊はつとして。扱も太い傾城め。どうする事ぞ試みると内より壁を懐かしげに。ほとく敲けば。ムウ聞えたり。調定めし何處も締つて入る事もなるまいと。妾が心に思ふ事こまぐと此の文にあり。篤くと讀んで自筆の返事見ますれば。地今生の本望と堀越に投込んだり。ア、誰が拾はうも知らないで女房のある男の屋敷。遠慮もないと開けば見知つた。あ。朧月にも見違へぬ吾妻が筆。仔細らしい一つ書。此の剃刀は妾が研ぐ心の及ぶもの折は必ずくさもしい者の手にかゝらす。深い御最期。

ふと日は同じ日。最期所はかはるとも來世は一つ運業に。永き契りを目出度と。地エ、此の剃刀の入れざまは。何うぞお命助けたさ。女房舅が泣きしみづき。父御様とも争ふ程の大事の命。澤山さうに死ねと書いた此の文に。目出度と何ぞやの。男どもにいひつけ叩き出してくれうか。イヤそれ程夫の名が立つ。地直に逢うて言うて退けうとフシ踏次の戸開き立出づれば。ナウ與州様か懐かしやと。縋り寄る手を確と取り。音に聞えた吾妻殿が。今の文も見ました。わしや與次兵衛殿の女房菊といふ者。遙々の所能うござつたの。定めて主に逢ひたかろの。知らしやる通りの難儀でアレ。あの座敷に押込められてはござれども。おれが逢はせぬ。ア、此の菊が逢はせぬ。吾妻殿には疾うに逢うて禮いふ筈。此方故に大事の家業も餘所になり。地内は野となれ山となれ夜を日についての里通ひ。親御の不機嫌世上の悪口。此の度

の難儀をそれ見たか。いよく人の嘲り。我とても女の身腹が立たいてある物か。夫の恥辱さがない女房といはれまいと。地々んで居ればお菊は奇特な。悟氣せぬ賢女賢女と。賢女ごかしの拜み倒しに逢うて。吾妻殿に誦讀まれ居るわいの。此方を女郎かと思へば鬼か天魔か。此の剃刀で人の男に死ねとは。死んでよくば此方一人死んだがよい。大事の男の膚は荒され。地心の底は見探され。世間に悪う謠はせ。生きる死ぬるの難儀も誰ゆゑぢや。傾城殿和女ゆゑ。地生傾城の恥知らずと積る恨みの高聲に。與次兵衛も障子そつと明け。彼方も此方も道理詰。道理のないは我ばかり二人の心思ひやり。顔は焚火の冷汗に。フシ消えも失せたきばかりなり。地いか程お恨みお叱りもお前に逢うて此の吾妻が。申し上げう詞はない。引く手敷多の身の上さへ。悟氣妬みは女の常。お心堅い。フシ町育ち。地誠なき傾城めが瞞しての賺しての。憎や

はお道理ながら。調與次兵衛様に逢ひましたは女房にならうとも。手かけ妾にならうとも申し交した事もなく。勤めばかりも馴染だけ夜を日にますお愛しさ。女子のなづむ風俗。よい殿御持たしやんした奥様。お世話はお前一人。此の度の騒動も人違を頼もしづくで。お身の難儀もわしから起る相手もやがて死にそなけな。地悲しいは我が身一つ知らせて覺悟もさせましたく。靡を忍んで此の有様。見付けらるれば見せしめに逢ふも合點。調相手死んだら自害させまし。妾もお供と剃刀も用意しました。お主の名も流さず妾も情の御恩に。地命捨つる心ざしお前の御縁は妨げぬ。たつたま一度お顔見せて下さんせ。其の目を直に塞ぎます。ナウお慈悲ぞやと懐中の。剃刀咽に押當て。娑婆の名残り涙さへ。フシ思ひ切つたる哀れきに。地お菊はやうく胸開け。袖引きとめて是吾妻殿。調義理にも命捨てうとは儂りにはならぬ事。心底がいと

しい主も定めし逢ひたからう。沙汰なしにそつと逢はせましよ。地ア、有難い料簡深いお菊様。大事の殿御を澤山に抱いて寝ました堪へてや。調ハテ取返へされはせまいしそれだけ此方の仕合せと。心とけたる路次の中。地お菊くと呼ぶ聲は舅の淨閑。鼠取の柄落し手に持つて嫁は何處にと立出づる。アレ爰へ親仁様折がわるい先づ暫しと。吾妻を屏の小蔭に隠し。調まだお寢も遊ばさず夜更けて何でござります。イヤ別の用はないは見やお菊。若い奴等が仕掛けて置いた柄落し。ばつたりと響いた故明けて見たれば。鼠は逃けて往んだと見えて柄の内には何にもない。是でつくく世の中の悟り開いた。中の餌食を頼みにして油断すれば。落しにかゝつてつい殺さるゝ。思ひ切つて餌を捨て。逃けて退けば其の鼠が命を助かるばかりか。親鼠舅鼠女房鼠もあるであらう。此の一家一門の鼠ともが悦び。別して老鼠の親鼠が心の体まりはいかばかり嬉しからうぞ。地若し若鼠の分別なしに。逃けた跡で親鼠が又落しにかからうかと。よしなない意地を立てをらうが。いかなく親鼠は老功で落しにかかる事ぢやない。調定めて伯父鼠もあらう。其の巢へ屈んで此處らさへ影を見せねば鼠落しも音なしになつてすむ。此の度の柄落しに能う懲りて夜毎に柄走り。盃嚙つたり親の小判咬へて盗んだり。暴れ廻る事ふつゝ止め。後には白鼠の富貴と榮えるを。親鼠が見る嬉しさどうあらう。調痴氣鼠の狼狽鼠。此の合點が往かぬかと。地おりや此の頃夜が寝られぬと。ステテ涙に聲をふくませば。如何にもく。調お慈悲な鼠算用成程私が逃しませう。テ、満足々々さつと胸が開いた。此の頃心に此の事ばかり持佛へ參つても佛の顔も見えなんだ。地嬉しや今宵から心靜かに看經せうと。念佛力の後姿オッリ見るに。心ぞ遺瀧なき。地與次兵衛走り出て聲を知るべのかたじけぬ。お菊は舅の足跡を

手に蔽いて吾妻様與次兵衛様。目今のお慈悲を聞かしたつたか。早う爰を退く程がお心安め孝行。地淨閑様の起隊（おこし）は此の菊が居るからは今迄より猶氣をつける。跡に氣遣ひ遊ばすなお前に誰ぞ附けたいが。アフドウかなと案ずれば。詞これお菊様それには此の吾妻が居る。命を捨て、出た廓二度歸る心はなし。地お前さへ御料簡お供せよとあるなればわしや忝い。廓へは歸らぬとスエテ思ひ詰めたる詞の末。地ヲ、そんなりや跡先首尾がよいサア更けぬ先にと引立つれば。與次兵衛袖を打拂ひさうでないさうでない。詞人の父としては慈にとまり。人の子としては孝にとまりといふ。預り者が墮落し先の相手が死ぬれば。忽ち親は下手人に捕られ首刎ねらる。假令先が無事でも取逃したる咎めにて。それ程の罪は親父様の身にかゝる。其の難（た）を厭はぬ慈悲心親父は親の道が立つ。地與次兵衛は今日迄始終親の氣に違ひ。剩へ親を身代りに逃げ

て命助かり。百年千年生きるとて人交りもならねば。天地の内には住まれぬ。詞お心をもどくでなく歎きをかくるが面白うはなけれども。地矢張此の儘死なせてくれ命を捨て、一生の孝行がして死にたいと。スエテ聲を上げて泣きければ。是も亦お道理と二人も、フシ心破りかね、泣くより外の事ぞなき。地淨閑内より聲を上げ。お菊く。不孝者めが落ちまいといふさうな。エ、く情ない哀れ知らず。七十になる淨閑が。もがられたといふ外聞（ぐわいぶん）わるさ。人にこそ知らせね。内證手を入れ二百兩迄扱うても。足元見て千兩でも聞かぬといふ。淺疵とは聞いたれども人の生身（いみぎみ）どうあらうかと親の案じはどう思ふ。地將養で心を紛らせば結局側（そば）から氣を付けて。思ひ出す程ッ胸苦しい。地宵から心粉にはたいした樹落し。量つても量られぬ。親の歎きを思ひやれ一生子でも居るまい。一度は親にもなりをらう。胸の中が知らせたい落つるか落ち

ぬかはや吐かせと。聲あられても泣顔は壁より。外に洩れにけり。地與次兵衛涙に平伏して。詞有難いお詞どうも此の與次兵衛。爰が立つて落ちられぬ。地眞平御免と伏沈む。詞ム、よい。年寄つた親を持つ者は一日も親を先立て。其の身息災で年忌追善。弔ひたいと願ふぞや。地汝は親に弔はれ歎きをかけて見たいか。サア此の比首（ひくし）腹へ突込んで。望みの通りにしてやるぞ。兩無阿彌陀佛といふ聲に申し、落ちませう。待つて下され親仁様とスエテどうと臥してぞ泣きゐたる。詞、しかと落つるか。何の偽り申さうぞ。ヤレ嬉しや落付いた今迄の不孝皆許し。三十年の孝行をたつた一度に受取つた。地死んだ婆も嬉しからうお菊には親がある。淨閑にはお菊がある。跡には少しも氣遣ひすな。詞連の女中がありさうな嫌がるとも灸（灸）すゑさせ。酒吞ませて下さるな。馬では人が面を見る高くとも駕籠に乗れ。地頼みまするとそこへ心は

千筋百筋の。縞の財布を投出しさらばとばかり、フシ言ひさして跡は、涙に咽びけり。地與次兵衛なほ有難き親の恩と妻の思ひ。別れの辛さに恍惚と。氣抜けの如くよろ／＼とステテ前後も分かず見えければ。

是吾妻ぢや合點か。あれは奥様お菊様。

さらばとせめて言はんせ。地エ、氣の弱いお人やと力をつくる我が身も。人目を深く忍ぶ夜のいざ相駕籠とさゝやきて、袖打拂ふ春の霜、フシ駕籠の業おじやと招きけり。

△地お菊の聲もうらがれて。なう何方に落付いても其の儘御無事の便りを待つ。泊り／＼の朝晩に冷えぬ様に頼むぞや。何やらいひたい事どもが胸にはあれど口へ出ぬ。

只御無事で息災でといふより外は泣くばかり。フシ誠をいはず。我こそは。夫を連れて退くが道。何ぢや妬み憎んだ人。相駕籠でやる妬ましさ羨しさと悲しさと。涙の筋は多けれど。愛しいばかり一道に。見送る駕籠も遙々と。さらば。／＼なうさらば

の聲を紛らす後夜の鐘。跡へ戻るは雲の足。先へ急ぐは駕籠の足。せめて肩して留めもせず。戀の重荷に小附して親子の哀れ打乗せて別れ。行方や

與次兵衛吾妻道行 下巻

歌春に育つも花誘ふ。蝶は菜種の味知らず。菜種の蝶は花知らず。知られず知らぬ中ならば。浮れ初めまい。狂ふまい物ナホス味氣なや。△地吾妻立寄りヲ、嬉しやお心も鎮まつたか。調アレ御覽ぜよ蟲でさへ番

ひ離れぬ揚羽の蝶。我々も二人づれ粹な同士のなか。お心弱やと勇むれば。△歌吾妻請出せ山崎與次兵衛。キン請出せ／＼山崎與次兵衛。何時か思ひのナ下紐解けて。昔思へば愛や辛や。愛や辛や忍ぶ昔も愛や辛や。△地情なや誰あらう山崎與次兵衛様とて人々に。後れぬ髪の亂れ心吾妻が顔も見忘れて。ステテ現なやと制すれば。△歌其方は藤屋の吾妻かの。與次兵衛に揉まれて。色のキ悪さよいとささよ。オクリ近い内

には必ずと、フシ請けて。樂さしよ世帯して。地子供儲けて二人が連れて。小オクリお乳が。肩くまおて、が日傘。肩で風切る山崎に。親の御恩を振捨て、其方の世話になりふりも。ホフシ昔には似ぬ男山今では人も

秋篠や。長地外山の松よ事問はん待つが辛いか別れが愛いか待つも別れもせぬ様に。親の許した女房は。義理と情の二面。ステテかけて思へどかひもなく。半太夫今は野末の放れ駒。昨日はあづまに戀を乗せ。今日は故郷のフシ焦れ泣き。我から狂ふ秋の葉の。亂れて袖に置きもせず。ハルフシ寝もせて露

の。たま／＼も。待たるゝとも待つ身になるな親と子の。便りを凌ぐ山崎の妻もさこそは亂れ髪。いうた詞が力ぞや、フシわしが馴染は。三重の帯。長い夜すがら引き締

めて妬み倍氣の心なく。預かる物は半分の主は忘れて居さんすか。過ぎし月見は井筒屋で底意限なき夜と共に。踊り明かした面白さわしや百迄も忘りやせぬ。歌

忘れぬ物よ。見あかぬ君が。外八文字の道中姿。目つきでギン殺す。所體になつむ。ギン傾城こまめにたらひが女房。請出したらひのフシ底脱けて。影も宿らぬ。きぬぐの親を悲み妻を戀ひ。心一つを二しなに。名乗りて過ぐる。杜鵑。フシ己が父に似て。父に似ず。子は色里に初音ふる。〇タ、冠は被ねど大盡と。△花車が轟く口舌の門。〇遣手が叩く。△禿が睡り。二人皆夢の間の境涯と。フシ破れば不粹もなかりけり。フシかくは知れども。柳の絲の蓬を亂す山嵐。烈しき親の諫めの詞。妻が別れの一言葉身にしみぐと戀しやと。互に手に手を取りかはし。フシ聲も惜まず泣きわたる。地夕陽岫に程もなく。西北に風起り東南に向ふ雲の足。コハリ棺木の間もはらぐ。小川の水音さらさら雪の羽袖もひらくと。彼方へ靡き。此方へ靡きくるりくるりくるりくるりとハツミ廻り廻るや。月は行けども。

果てしなき思は目前親の罰。當つて碎くる男の姿走れば走り留まれば留まり。狂はぬ袖も亂れ心命。つれなき流れの身。ギン流れ渡りの世の中に。暫し留まる賤が家の軒を。尋ねて三三へ惱みけり。フシ難波湯梅に。名を取り松繁り。地紅葉の錦畫さへや夜見世を新にお許しと。疾しや遅しと見に廓四筋の町の軒深く。燈火星の如くにて。三五以上の月の顔オクリさす汐影のわけもよき局。ぐの手拭は濡れぬ隙こそ。フシなかりけり。地太鼓は打たて大門に轟く馬の高嘶き。井筒が許へ乗懸の客は八幡の難與平。威勢美々しく飛下るれば亭主迎ひの槌で庭。はくまい九郎左見忘れか。當富正月には造作の上。地貴殿が世話に難與平。以前は金銀内大臣今日参るは内証に。様子も金もある大臣罷通るとすつと入る。誠にさうよお珍し先づお茶烟草と輕薄に。油載せたる燈臺もはや立ちかはり蠟燭の。フシ流枕の里ぞ

氣散じなる。九郎左近うと招き寄せ。知らるゝ如く此の正月藤屋の太夫に貰うた金。直に東に芽を出して人いためすのどが儲け。馬の脊骨も折りかひあつて此の度罷歸る所。太夫吾妻は廓を逃出し。關を破りし科人と行方を求め搜さる由。道中すがら承る。恩を受け詞を番ひし此の與平捨置いては男立たず。地彼を請出し世を廣うしてやらん。吾妻が年期の證文あらん此方へ貰ひたし。金に換へて今宵の中に首尾する様九郎左御差配々々と。ちよつとの露もしつほりと。フシ家内潤ふばかりなり。お目出度いぐ御聞きとあるからは申すに及ばずさりながら。不思議な事がござります。今日暮方に田舎めいたる浪人衆。吾妻は爰に居られずとも手形なりとも身請がしたい。地金はなければ一腰の宇多の國行。二尺許りの大刀物折紙共に引換へと。奥の座敷に居られます親方へはまだ知らさず。お前と一所に親方へ。フシいうて見まし

よと立出づる。表の騒ぎは葉屋の彦介とかく入り来る。コリヤ珍しい旦那。とれたかく。果報な九郎左金儲けうなら我等に廻れ。軽いお出が身請の談合強いかく。知つた通り此の春早々。山崎の與次兵衛めに小鬘先をちよつられた。弓矢八幡堪忍せぬ氣。代官所へも訴へ親淨閑に御預け。内證から手を入れて段々と説言する。金銀で扱へば百萬兩でも聞かぬ男。コレ見よ疵も平癒した。與次兵衛めは憎けれど。親めが心が不便さに許してやつた。其の禮として目くさり金樽代としてよこした。酒戻しはせぬ物ゆゑまあ受取つて置いたぢや。吾妻めが關破りも。與次兵衛が咬しお預けの内を連れて逃けた。淨閑は其の榮りに吾妻與次兵衛尋ね出す迄。道具諸色に封印付け殿しい閉門。聞けば與次兵衛めは野倒死したけな。出れば其の儘切らるゝ首仕合者ぢやあるまいか。扱談合は吾妻が事。關破りの科人こいつが命も助から

ぬ。佛性に生れ付いたが彦介が病ぢやわ。是も助けて取らせたい。先づ吾妻めが手形を請出し。跡では緩々行方を尋ね飯でも焚かせ。すゞぎ洗濯。手足擦らせ一生は養ひ殺しにする覺悟。地彦介なりやこそ斯うもいへ相談して埒明けい。コリヤ現銀ぢやと五十兩亭主が前へ投出す。與平始終を聞きすまし御免と襖押開き亭主々々。吾妻が身請は身が先ぢや。地金子は是ぞと持せたり。千兩包みの木地の臺前にすつしり飾らせたり。前後の争ひなさられば此の浪人者は一番と呼ばはつて座敷に出で。身請の代金此の一腰三千貫の折紙と。共に投出す態恰好中身は見ねど與次兵衛が。物語の治部右衛門。擬なしと難與平。フシ口を閉ぢて窺ひ居る。地亭主九郎左は福徳の三方論議に行當り。兎角は親方料簡次第呼びにやらうか身が參らう。それは御九郎左くとフシ獨語して駈出す。地跡は互の睨み合ひ彦介は手懲した。與平が顔の氣味悪く心も心な

らねども。見つきはきつい服部育ち。烟草盆引寄せて烟吹出す佛頂面。烟管ぞ迷惑灰吹をフシ叩いて返事を待ち居たる。地吾妻が親方勘右衛門亭主に連れて座敷に出で。様子は九郎左物語り吾妻が手形を身請とは。遂に廊にない格にて。兎角のお返事申しがたし。何れへ手形上げましても。此の事世間に流布あつて駈落させた跡にても。金さへやれば濟む事と悪い性根を吹きこまれ。地そこにも駈落爰にも逃けた又しては關破りと。廊の騒動親方仲間の難儀なり。此の相談はなりません。一旦吾妻が顔を

見て其の跡では能い様にと。聞きもあへず聞えた。餘人は知らず此の彦介早速吾妻を尋ね出し。地身請はおれぢや詞を番うた罷歸るとすんど立つ。さうはさせぬと難與平小腕取り引かづいてどうと投げ。脊骨にしつかと打跨り。地逃足も往に足も達者に生れ付いた男。動かば頭撲碎く合點か。藤屋の勘右尤千萬今の詞は聞き處。吾

妻が顔を二目見たらば其の座で身請は違ひないか。何の虚言申しませう。末に年期の少ない吾妻。今迄金は儲けてくれる僞は申しませぬ。ム、面白い代官所の首尾も別條ないか。其の段も此方より申し下せば相濟みます。珍重々々。下々ども其の革葛籠持つて来い。亭主二つを開かれよ。地あつと葛籠の紐とくく。中より吾妻與次兵衛フシ正氣になつて立出づる。地彦介はびつくりし親方亭主も興覺め顔。治部右衛門は包みかねヤレ與次兵衛か治部ぢや。無事な顔見てフシ嬉しやと跡はいはずの悦び涙。與次兵衛も頭を下け何事も御免あれ。親淨閑へお詫言。頼むに及ばぬ淨閑の心入れも聞いてゐる。吾妻もいかい苦勞めさつた。ナウ親方殿此の上腰に引換へて。地吾妻を身どもに下されと手をつけば。吾妻も久しい九郎左様。旦那様へお詫言ステ頼みますると泣き居たり。與平勇んで彦介を取つて引立て。おのれよう聞け此の與平が江戸

へ家ぎの根本は。吾妻殿を請出して廓の苦患を助けんと。思ひ込んだる一商ひ。五百貫目に間のない金手間際入らず儲け蓄め。立歸る道すがら與次兵衛殿にもお目にかゝり様子は段々聞届けた。おのれを切つたは此の與平。與次兵衛殿に難儀を見せ金銀大分取つたな。地打ちのめしても腹癒ねど。目出度き時節ぢやとつと歸れと突放せば。與ア有難や正月も此の座敷で取つて投げられ。跡は切られて今日は又。殺さるるかと思うたがお助けは忝い。地三度數が合ひましたと逃出づるを治部右衛門。腕挫ぎに取つて投げ。おのれはとうも往なされぬ。淨閑が言譯させ。閉門御免請けねばならぬと手ばしかく縛り上げ。身請は濟んだか與平殿。地いやまだ濟まぬ。金子は千兩一枚の。手形に換へると難與平親方が前に置く。地勘右衛門頭掉り。來二日には年も明き身任せになる吾妻。千兩といふ金取つては人の思はく男が立たぬ。金取らず

ともと申しただけれどよもや左様はなされまい。跡六月をば三百兩残りは入らぬと突戻す。地與平素より氣散じ者出来た出来た。手形は取つた金取つた吾妻が身請濟みました。其處で請出す三百兩打つておけ。しやんく。ま一つせい。しやんく。すつたとせい。地コリヤ亭主。此の千兩は始めより身請に當てた。一錢でも残しては本意ならず。三百兩は亭主にはづむ。コリヤ忝い。二口合せて六百兩。打つておけ。しやんく。四百兩残つて氣にかゝる。地寄つて祝へとばら。フシ金は座敷に色變へたり。揚屋の男女別ちなく。押合ひし合ひ拾ひ取り皆取り込んだか目出度い目出度い。祝うて三度しやんく。と手拍子に口拍子。仕合せ拍子の三々九度。末は千秋萬年も變らぬ。妹脊を重ねける。